

特別稿 秩父宮記念山岳賞を 特寄 受賞して

元 JICA 海外派遣専門家
安間 繁樹
(やすま・しげき)

ボルネオ島と西表島を長年フィールドワークしている安間繁樹さん（哺乳動物生態学専攻）が、昨年末、秩父宮記念山岳賞を受賞されました。安間さんはまだパソコンが普及していなかった頃、本誌にボルネオから郵便で熱帯雨林の環境について、いち早く情報を伝えてくださっていました。山岳賞受賞を機に、ボルネオの現状を報告願いました（写真提供：著者）。

日本山岳会は一九〇五年創立、日本の山岳界において最も規模が大きい団体である。年に一度の晩餐会が、昨年は一二月七日、都内のホテルで開催された。出席者五〇〇名、会員でもある天皇陛下も臨席された。晩餐会最大のイベントは秩父宮記念山岳賞の授賞式である。本賞は、山についてご造詣の深かった故秩父宮殿下及び同妃殿下の事跡を永く記念するため、山に関連する顕著な活動または業績にたいしてこれを表彰し、もって登山活動

の奨励と山岳関連諸文化の高揚に資することを目的とし、平成一〇年度に創設されたものである。第二一回にあたる昨年は、「熱帯雨林における長年にわたる動物生態調査、及び西表島の峰と谷の踏破のバイオニアワーク」が評価され、私が受賞の榮譽を賜った。私が初めてボルネオ島を訪ねたのは一九八五年だったが、翌一九八六年からは国際協力機構（JICA）の専門家として足かけ二五年間、満一六年をインドネシア・カリマンタン、ブル

ネイ、マレーシア・サバと、ボルネオ島内で生活し、動物の調査研究と若手研究者の育成に携わってきた。この間、『原子力文化』には一九八九年から五年間「カリマンタン通信」を連載させていただき、その後も折につけボルネオ島の現状を報告してきた。記事は二〇一〇年が最後だったが、今回の受賞を機に、その後のボルネオ島について報告したい。



●アジャゾウ。深い森林に棲む動物だが、最近は農園にも出没する

◇地球温暖化をもたらすもの

第四紀氷河時代は約二六〇万年前に始まり、現在も続いている。氷河時代は「高緯度から中緯度にわたる広大な地域が氷床に覆われる寒冷な氷期」と、「北極と南極にのみ氷床が見られる比較的温暖な間氷期」とがある。氷期と間氷期は四万年から一〇万年の周期で繰り返される。現在の地球は最後の氷期から約一万年を経た間氷期にある。私が学生だった五〇年前、地球は寒冷化していると教えられた。しかしこの説は科学的根拠に欠け、蓄積された資料からは、逆に温暖化していることが明らかになった。地球の平均気温は一九〇六年から二〇〇五年の一〇〇年間で〇・七四度上昇。特に二〇世紀後半以降、加速傾向にある。昨年一二月三日、日本の年平均気温が発表されたが、二〇一九年は一八九八年の統計開始以来の最も高い値を記録した。台風は二九個発生、一五個が接近、五個が上陸。それぞれ例年の数値、二五・六個、一一・四個、二・七個を上回った。これも地球温

暖化の影響と考えられている。地球温暖化は太陽活動の影響、宇宙線の影響、地球内部の活動、磁気圏の活動などが原因とする説もあるが、人間の産業活動に伴って排出された二酸化炭素やメタンによる温室効果ガスの影響量が主因となって引き起こされているとする説が主流である。

◇ボルネオ島の現状

ボルネオ島の朝は深い霧に包まれている。一〇メートル先も霞んでしまいうような深い霧だ。ところが、二〇一〇年頃から霧の日が急速に少なくなってきた。大きな森が残るダヌムバレーやデラマコット保存林ではまだしも、アブラヤシ農園が広がる河川の中流域から下流域では、一週間程度の滞在では霧が見られる朝はない。何が起きているのだろうか。温暖化の影響かもしれないが、私は身近な森林の消失が直接の原因だと考えている。日本の二倍の面積があるボルネオ島。しかも、平均樹高が五〇メートルにもなる巨大な森林が消えたことは、むしろ、

地球温暖化に
加担している
のではないかと
ささ思えて
くる。

ボルネオ島は、かつては島のほとんどが森林に覆われていた。その七〇パーセントが低地混交フタバガキ林（熱帯多雨林）であり、アジアではもっとも大きな森林であった。ボルネオ島の大規模森林伐採は一九五〇年代に始まった。それは第二次世界大戦からの復



●深い朝霧。最近は霧そのものが少なくなっている



●果てしなく広がるアブラヤシ農園

興とアジア諸国の相次ぐ独立が引き起こしたものだ。当時は林業以外めぼしい産業は少なく、林業は総生産において大きな比率を占めた。例えば一九八七年にはサバ州政府歳入総額の七一パーセントに達している。しかし、森林資源が無限にあるわけではない。一九九〇年頃からマイナス成長に転じ、一九九四年には歳入総額の

二三パーセントにまで低下した。そんなボルネオ島に現れた「救世主」がアブラヤシだったわけである。二〇一七年の資料によると、栽培面積はサバ州一・五四万平方キロ、サラワク州一・五六万平方キロ。統計のある一九七五年からの四二年間でそれぞれ二・六・二倍、一一倍の面積に拡大し、ボルネオ島最大の産業となっている。こうして、伐つても、伐つても伐りつくせないし、成長し続けると信じられてきたフタバガキ林が消滅した。現在ある比較的良好な森林は林業局の管理下にある保護林、保存林だが、それとて択伐後の二次林である。

飛行機から見ると果てしなく広がる濃緑のじゅうたん、その正体はアブラヤシ農園だ。それを熱帯雨林だと勘違いしている人もいるかも知れない。また、初めてボルネオ島の保護林を訪ねる旅行者、さらには一部の研究者まで、森林の巨大さに感嘆している。しかし、単に昔を知らないだけで、原生林を見て来た私にとっては、なんだか空しく映ってくる。もはや原生の

熱帯雨林はボルネオ島にないのだ。植林が行なわれている。しかし、保護林内での実験的な規模に過ぎず、森林再生とは程遠いレベルだ。また、アブラヤシに関しても品種改良や大規模な火入れの禁止など環境に配慮した試みも進んでいる。自然保護の気運も高まり、努力を続ける人々や企業も存在している。それにしてもアブラヤシ農園の拡大がすぎすぎる。国策であり今考えられるベストな産業だから、しばらくは止まることがないだろう。

ボルネオ島はどのように変わっていくのだろう。少なくとも都市部は日本の大都市と似た繁栄したものになるだろう。街道沿いの市町村も同様の外観になるだろう。一方、地方では過疎が進むが、何十年かはアブラヤシの農園が広がり続けるだろう。しかし、アブラヤシの輪作が限界に来た時、はたして、ボルネオの大地はどうなるのだろうか。今、残っている比較的良好な保護林・保存林が、自力で森林を再生・拡大する潜在能力をもっていてくれることを祈るばかりである。

